

# 学会だより No. 119 2024年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

HP： <http://dept.sophia.ac.jp/human/philosophy/>

## ☆第100回上智大学哲学会大会のお知らせ

今春、下記の要領で第100回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2024年6月29日（土）13:30～17:00

会場：上智大学四谷キャンパス7号館14階特別会議室

### ★プログラム

#### I 研究発表 13:30～15:00

○片柳那奈子（本学大学院文学研究科哲学専攻博士前期課程）

「哲学対話」はいかなる点から哲学的となるか

— 哲学的解釈学を手掛かりにして —

○芝元航平（本学哲学科非常勤講師）

龍樹の空の思想を通してトマス存在を考える

— 実体概念を手がかりとして —

——休憩——

#### II 講演 15:20～17:00

○茂牧人（青山学院大学教授）

無底とく形而上学の克服

— シェリングからハイデガーへ —

#### III 懇親会 17:30～19:30

於：カフェ・アマルフィー

参加費：上智大学哲学科教員 6000円

本学会員・その他 5000円

上智大学哲学専攻在籍大学院生 3000円

（※参加費は参加人数によって多少変動する可能性があります。予めご了承くださいますようお願い申し上げます）

## ☆講演要旨

### 無底と〈形而上学の克服〉

— シェリングからハイデガーへ —

茂 牧人（青山学院大学教授）

筆者は、1976年に本学哲学科に入学したが、哲学を研究したいと志したのは、「人間の存在の根拠・根底を探りたい」と思ったからであった。それから45年以上が経った今、その探究の途中経過をお話しすることになる。その探究で出会った「人間の最深の根底」は、シェリングの「無底 (Ungrund)」であった。

学生時代に「なぜ神が存在するとして、この世の中に悪があり、この世界がこれほど不公平にできているか」という問いが彷彿としていた。この弁神論の問いは、不公平や悪の酷さがどこに根拠をもっているかという問いへと収斂する。一般的に哲学史の中では悪は、〈善の欠如 (privatio boni)〉として捉えられるが、それでは悪のある種のリアリティを捉えることはできない。悪の問題は、理性の限界を超える問題であることに気づかされる。まさに「無底」概念こそ、理性の限界を超える概念なのであり、そこから宗教的次元へと入っていくことになる。

本講演では、その無底が、人間の自由と悪の問題の根拠・根拠であり、また悪の問題からの救済の原理でもあることを闡明する。どうして理性の体系を超える無底が、人間の自由の根拠になっており、その自由からでてくる悪の問題の可能原理となっているのかを明らかにして、そこからどのような仕方で救済が図られるのかを解明したい。その鍵となるのが、無底の理性の体系の「外部性・異他性 (Alterität)」という構造である。無底の否定神学的構造自身が、悪の問題の可能原理となり、救済の原理となる。

さらにシェリングの無底概念が、ハイデガーの「深淵／脱根底 (Abgrund)」の省察へと受け継がれる。ハイデガーは、このシェリングの悪の問題や弁神論の問題には関心がなかったのであるが、この無底概念から「深淵／脱根底」概念を練り上げ、彼の1930年代以降の存在の真理の思索の中にでてくる鍵概念として継承する。存在の真理の「深淵／脱根底」の思索は、過去の形而上学の歴史を存在忘却の歴史として洞察することのできる次元を呈示することになる。いかにしてハイデガーの深淵/脱根底の否定神学的構造が、彼の〈形而上学の克服〉というモチーフの根拠となりえるのかを明らかにする。

## ☆研究発表要旨

「哲学対話」はいかなる点から哲学的となるか

— 哲学的解釈学を手掛かりにして —

片柳那奈子（本学大学院文学研究科哲学専攻博士前期課程）

本発表は、哲学的解釈学を参考に哲学対話の哲学的性質について考えることをテーマとする。本発表は、H.G. ガダマーの『真理と方法』を参照し、彼の対話的な範型を用いた理解の運動としての哲学的解釈学から、その異質性に直面することにはじまる理解と、問われるという仕方での問いのあり方について明らかにしつつ、哲学対話における「哲学的」とされる点がどのような営みによるものかを明らかにすることを目的とする。

哲学対話と呼ばれる哲学的対話の実践には名称を同じくしていくつかの形式があるが、参加者が共通のテーマについて共に探究し真理を追求するという側面は共有していると考えられる。その実践は、自分自身の言葉で問いや考えを述べ、それに他者が応じるという対話の形式で行われ、結論を導き出すことではなく思索をより深く巡らすことや自己が変容する経験をすることに主眼が置かれている。そこには他者との出会いによって起こる理解があるのであり、対象を明確に言表することを目的としない理解があると考えられる。

一方ガダマーは、理解と対話について歴史的に継承されてきた認識や知識に基づいて、我々は現実や自己自身を認識し理解を遂行しているとし、そのような歴史性をもつ先入見なくしては理解につながる対話にはじまることがないと述べた。それは、常に生成され続ける現在の地平としての先入見によって、異質なものと直面することとなり真なるものに開かれていく営みであるところの、問われ応答するという対話が始まるということを示している。

また、異質性と直面することによる解釈と理解は、対象を客観的認識にもたらしめるための方法ではなく、事柄の理解であるという点で、自然科学における理解と異なる性質を持っているとガダマーは述べ、精神科学としての哲学の本性にもその問題意識は至っている。ここで述べられている事柄とは、主観性を超えて対話者たちを結びつける共通のものであり、事柄それ自身の展開によって対話が一種の自律的な運動としてなされることで主観を変容させるものとして語られる。そのような自律的な対話は、対話者たちの意図を超えて予測しなかった帰結へと導いていくものとして、行われるという仕方ではなく「思いがけず入り込む」ものであると述べられる。

以上の諸点に対話を哲学的なものにすることを示そうと試みる。

龍樹の空の思想を通してトマスの存在を考える  
——実体概念を手がかりとして——

芝元航平（本学哲学科非常勤講師）

本発表は、トマス・アクィナス（Thomas Aquinas 1224/25-74）と龍樹（Nāgārjuna 150 頃-250 頃）について、その哲学的洞察の共通性と相違性を明確にするという観点からの考察の試みである。なお、発表者としては、相違性よりも共通性という観点により重点を置きたいと考えている。存在に基づくキリスト教的な世界観を大成したスコラ学者であるトマスの哲学と、空の思想を基本とする大乘仏教の代表的な論師である龍樹の哲学は、一見するところ、全く相いれないものであるように思われる。しかし、発表者には、トマス独自の思想である「存在」(esse) の観点からは、両者の哲学には相通じる点も少なからずあるように思われるのである。

なお、発表者の専門は西洋中世哲学であり、これまでトマスの存在論を中心に研究を行ってきた。したがって、龍樹の立場から予想されるトマスの存在論に対する批判に対して、トマスの立場からはどのような回答が可能であるかということを考えるという仕方で考察を行いたい。

トマスと龍樹の思想の比較を行っている先行研究としては、管見の及ぶ限りでは、比較神学の専門家であり、仏教との宗教対話を実践してきたカトリック司祭でもある James L. Fredericks による 1995 年の論文と、分析哲学と宗教哲学の専門家である Paul O' Grady による 2006 年の論文が存在する。これらの研究はどちらもキリスト教の立場から龍樹よりもトマスを高く評価するものではあるが、貴重な先行研究であり、さらに、龍樹の空とトマスの存在の構造的な共通点も指摘するなど興味深く重要な論点を含んでいる。したがって、まずこの 2 つの先行研究の概要を紹介することから考察を始めることにしたい。その上で、龍樹の空の思想の概要に触れた上で、そこから想定されるトマスへの批判とそれへの回答を考察することとする。発表者としては、龍樹とトマスは哲学的洞察を共有しているにもかかわらず、「実体」に関する理解に根本的な相違があることを指摘することで、トマスの存在論の意義と問題点の解明に資することを目指したい。

## ☆ご案内

中世思想研究所では、上智大学哲学会会長も勤められた K・リーゼンフーバー先生への尊敬を込めて、「元・所長クラウス・リーゼンフーバー先生記念ページ」をホームページ内に開設いたしました。2008年2月に行われた最終講義「時間です！ー時の声、自己の誕生」の動画(当日配布資料共)を掲載してございます。是非、ご高覧下さい。(URL: <https://dept.sophia.ac.jp/is/imdthght/memorial/>)

(記：会長 佐藤直子)

## ☆事務局からのお知らせ

### ◇学会費納入をお願いいたします。

上智大学哲学会の会計年度は10月1日に始まります。現在の年会費は、一般正会員が3,000円、大学で専任教員の職にある正会員が4,000円です。会費納入に際して郵便振替をご利用の場合、領収書は払込票をもって代えさせていただきます。振替手数料は、恐縮ですがご負担くださいますようお願いいたします。哲学会大会当日も、受付にて納入を承っております。学会の安定した運営のため、早期納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

### ◇「短信」や「会員の本」欄に報告したい出来事やご著書などがございましたら、事務局(sophia.philosophy.society@gmail.com)までご連絡ください。

◇住所や電話番号の変更、所属等の移動があった方は、会費納入の郵便振替表の通信欄・葉書・メール(sophia.philosophy.society@gmail.com)等で事務局までお知らせください。お送りした郵便物が「転居先不明」で返送されてくるケースが毎回散見されますので、ご協力をお願い申し上げます。

(記：事務局幹事 石田寛子)



## 研究発表の募集

上智大学哲学会では、2024年秋の大会（第101回大会、10月20（日）に開催）の研究発表者を募集しております。発表を希望する方は、以下の記載事項をまとめた電子データ（必ずPDFファイルとwordファイルの両方）をメールにて提出していただきますようお願いいたします。なお、本学大学院生は発表応募に際して必ず指導教員の先生と事前に相談するようお願いいたします。

1. 所属・氏名・メールアドレス
2. 題目
3. 発表要旨（800字～1000字）
4. 上智大学哲学会大会でこれまで発表した回数と時期

**提出締切：2024年8月31日**

なお、希望人数が多い場合は、上智大学哲学会委員会にて調整させていただきますので、ご了承くださいませよう、よろしくお願い申し上げます。

※問い合わせに関しましては、下記の電話・ファックス・電子メールでも結構です。

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414

E-mail：sophia.philosophy.society@gmail.com

## 『哲学論集』原稿募集

『哲学論集』第54号（2025年10月刊行予定）に掲載する研究論文を下記の要領で募集いたします。

- 応募資格：当年度までの会費をすべて納入済みの正会員であること
- 提出締切：2025年4月末日
- 執筆要領：A4判用紙1枚を横長に使用し縦書きとし、注を含め16,000字以内。  
（半角英数字はふたつで1字）
- 応募要領：電子データを下記の上智大学哲学会E-mailアドレスまで送付すること。  
必ずPDFファイルとwordファイルの両方をご提出ください。  
※数日中に事務局から受領確認のメールを送付いたします。もし連絡がない場合、お手数ですが事務局までお問い合わせください。
- 注意事項：論文掲載権は、編集委員会に一任される。  
**※字数に関する規定が厳密になりましたので、ご注意ください。**

※問い合わせに関しましては、電話・ファックス・電子メールでも結構です。

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414

E-mail：sophia.philosophy.society@gmail.com